

複数弱定 NP
—— 運用力獲得時の L1 定冠詞の影響と
L1 日本語話者に対する教育一考 ——

Plural Weak Definite NPs: The Impact of L1 Definite Articles and
Some Educational Strategies for Proficiency Acquisition
in L1 Japanese Speakers

曾根洋明

Hiroaki Sone

宮城大学基盤教育群

Faculty of Foundational Academics, Miyagi University

【キーワード】

定冠詞
複数弱定名詞句
フィンランド語
チェコ語

definite article
plural weak definite NPs
Finnish
Czech

【Correspondence】

曾根洋明
宮城大学基盤教育群
sonehiro@myu.ac.jp

【Support】

本研究は JSPS 科研費 JP21K18362 の助成を受けたものである。

【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2024.05.07

Accepted 2024.09.02

Abstract

The study shows that mastery of weak definite NPs in L2 English is likely to be enhanced by the development of the definite article in L1. This is evident in our comparison of L1 speakers of Finnish and Czech, where the article is evolving but weak definite NPs are not yet used, and L1 speakers of Japanese, lacking the article. The speakers' proficiency in English plural weak definite NPs aligned in the same order with the article's evolution (Finnish > Czech > Japanese). While the article might possibly come into being in the distant future in Japanese, education should address L1 Japanese speakers' understanding of the NPs. Although 'the + plural NP's are inherently inclusive of all possible referents in the common ground, there are weak definite NPs where such inclusivity is pragmatically not the case; many L1 Japanese speakers, however, may mistakenly assume 'the + plural NP's always refer to all. Furthermore, emphasis should be on cases where speakers' intention to refer to subsets fails due to their cognitive inseparability from the rest, leading to the whole aggregates, as proxies, being referred to with 'the + plural NP's.

1. 研究概要と意義

弱定 NP は定冠詞が誕生・定着する過程の後期に醸成されると考えられる。英語には既に存在する。しかし、フィンランド(以後, Fi)語やチェコ(以後, Cz)語においては定冠詞が定着しつつあるものの、弱定 NP の使用は管見の限り報告されていない。少なくとも明確な使用は未だされていないと考えられる。

本研究では、L2 英語における弱定 NP の運用能力が、L1 において定冠詞が誕生・進化することで、向上する可能性が高いことを、定冠詞が誕生・進化しているが弱定 NP は明確な使用がされていないと考えられる Fi 語と Cz 語の L1 話者、および定冠詞が存在しない L1 日本(以後, Jp) 語話者との比較研究で例説する。

L1Jp 語話者においても、今後、Jp 語における定冠詞の誕生により L2 英語における弱定 NP の運用能力が向上する可能性は否定できないが、難しいと考える。故に、教育によってこれを早期に補完することは極めて意義があると考えられる。本研究では、L1Jp 語話者は特に複数弱定 NP の運用能力が劣ることが分かった。これに関連して、本研究では、the + 複数 NP が、指示しうる対象全てを指示しているとは限らないことを明示的に教育することが大事だと主張する。一方、『全体』を構成する『要素』同士の境界が明白でない、または重なっていると話し手が感じる場合、一部の『要素』を指す際には、代わりに the + 複数形を用いて『全体』を一括りに指す傾向が高いと明示的に指導することも提案する

2-1. 弱定 NP

- (1) This is the book I talked about.
 (2) I'm on the phone! (Aguilar-Guevara 2019)

(1)の the book は、話し手が以前に言及し話し手と聞き手の両者が唯一に特定可能な本を指す。一方、(2)の the phone は特定の電話を指示しない。前者が示す唯一性は、the 等 + 単数 NP が示す性質として Russell (1905)が最初に指摘したもので、しばしば、この性質を以て同 NP の特徴を説明する性質である定性¹とし、定性を示す NP を定 NP、唯一性に基づく定 NP の解釈を定解釈と呼ぶ。(2)のように、the が付いているが唯一性が要求されない NP を Carlson and Sussman (2005)や Poesio (1994)は weak definite と呼んでいる(本研究では弱定 NP とする)。また、弱定 NP に対する、唯一性が要求されない解釈を弱定解釈という(Poesio 1994)。

次に、NP が複数および不可算の場合について述べる。

- (3) These are the books I talked about. [3冊の本を目の前にして]
 (4) In Sendai, we went to the mountains.

(3)の the books は、話し手が以前に言及した、話し手と聞き手がどちらも認知している全ての本を指す。一方、(4)の the mountains は、地域の山全てに行ったとは考えづらく、一部の山しか指示しない。複数の NP に定冠詞等が付いた場合は、common ground に存在する、the NP が持つ属性を満たす全ての token を指示し(Ionin, Baek et al. 2011)、この the NP も、単数の場合と同様、定 NP と呼ぶ。また、この性質を、単数定 NP が示す唯一性に対して、maximality (最大性²)と呼ぶ(Ionin, Baek et al. 2011)。しかし、(4)のように、最大性を示さず指示範囲が曖昧な場合がある。この種の NP も弱定 NP と呼び、その解釈も弱定解釈という。また、不可算 NP においても部分指示解釈を要求する例があり、同様に弱定 NP、弱定解釈と呼ぶ。

Brogaard (2007)によれば、(5)では全員が質問せず、(6)では全員が質問したと解釈される傾向が高いとし、数が多いほど最大性を満たす可能性は低くなるという。また、同研究は(7)を例に、

NP に含まれる形容詞や形容詞節が具体的になればなるほど最大性は高まると考察している。

- (5) After the lecture, the fifty Chinese students asked questions.
- (6) After the lecture, the three Chinese students asked questions.
- (7) The German students who entered the room towards the end of the lecture asked questions.

2-2. フィンランド語とチェコ語における定冠詞の出現

Jp語(原田 2016, 猪浦 2016)やFi語(猪浦 2016), Cz語(原田 2016)は無冠詞言語であると言われてきた。しかし, Fi語(Laury 1997)やCz語(Dvořák 2020, Townsend 1990)では, 口語に定冠詞(Fi語: *se*, Cz語: *ten*)が定着しつつある。Greenberg (1990)の‘cycle of the definite article’によると, 定冠詞の多くは指示詞が進化して誕生するという。同cycleは, Stage 0にある指示詞はStage 1で定冠詞, Stage 2で特定性を示す標識形態素, Stage 3で単にNPを先導する形態素と変化していくとする。Laury (1997)はFi語がStage 1にあると言い, Dvořák (2020)からCz語も現在Stage 1にあると考えられる。

2-3. フィンランド語とチェコ語における定冠詞の指示力低下およびL2英語における弱定NP運用力の向上

指示詞から発展した定冠詞は進化とともに対象物を指示する力が低下するという(Keenan 2011)。また, Stage 1においては対象を唯一に特定する機序が「語用論的定性」から「意味論的定性」を介する機序に発展すると指摘されている(Dvořák 2020)。これらの言説から, 本研究は, まず, 定冠詞の指示力による「外界照応」や「前方照応」などが発達し(以上, 語用論的定性), その後, 定冠詞の指示力が低下するにつれ, Nの力のみで唯一に対象を特定させる唯一物指示(e.g. the sun)などが発生する(意味論的定性)と解した。

Fi語の *se* は少なくとも意味論的定性まで(Laury 1997), また, Cz語の *ten* は語用論的定性と意味論的定性の途中まで進化している(Dvořák 2020)という。よって, 本研究は, Fi語の定冠詞のほうが進化し, 指示力が低下していると考えた。

本研究では, 定冠詞の指示力低下が指示力の希薄な弱定NPの発達を促すことが多いと考えた。しかし, この発達には時間を要する。例えば, ドイツ語の定冠詞は, 古高ドイツ語期³の終盤までに発達したが, 弱定NPが生起し始めたのは16世紀以降である(Demske 2020)。更に, L2英語の定冠詞運用能力にはL1の転移があるとする研究が多い(Alishvandi 2015, Ionin, Zubizarreta et al. 2008, 伊東 2014, 鈴木・白畑 2012)。以上から, L1定冠詞の進化に伴い弱定NPが漸次成熟し, その感覚がL2英語に転移し同語における弱定NPの運用能力が高くなると思索し, その能力はFi > Cz > Jp語話者と予想した。以下, これに関する調査の詳細を記す。

3. 方法：弱定名詞句運用能力 調査・分析

調査対象者はL1Fi語話者, L1Cz語話者, L1Jp語話者, 年齢は18才~29才とした。英語レベル別の分析をするため, L1Fi語話者とL1Cz語話者にはCEFRのレベル基準を示し自己評価させた。また, L1Jp語話者には, 過去2年間に獲得した最高TOEICスコアが含まれるスコア帯を申告させた⁴。

問題(表1)には本研究が関心を寄せる事項(注目事項)が弱定NP以外の問題も含めた。計17問だった(調査1)。また, 調査1で使った問題2問を含む複数弱定NPの問題6問を追加した(調査2)。弱定NP等の問題に対する正答は, 米国L1英語話者が40%以上支持した選択肢とした(表1)。複数の選択肢が40%以上の支持を得た場合は, 対象者が適正な弱定NP感覚を具備しているかを

調査問題(調査1, 調査2)およびL1英語話者の選択肢選択傾向 ^a (下線:調査2)	注目事項	問題(説明) ^c	選択肢 ^d および自然句(正答)「下線」	L1英語話者(N = 111) a 選択率
1 弱定NP, 単数	注目事項	To get to Dr. Smith's office, I suggest taking _____ (「I suggest ...」部分は「Dr. Smith's officeがあるところに向かうバスを使うといいよ」を意味する。)	bus, a bus, the bus, 分からない	a bus: 62.2% the bus: 44.3%
2 弱定NP関連, 単数	f	It's hot in here. Could you open _____? (同じ大きさ, 形の窓が複数見えている。)	window, a window, the window, 分からない	a window: 91.9% the window: 10.8%
3 後置修飾型, 単数, 母集団内token数不明		This is _____ that I met yesterday. (聞き手はこれまでこの「少年」に会ったことではない。この文を聞いても昨日「私」の人数は分からない。)	boy, a boy, the boy, 分からない	the rides: 95.5% rides: 5.4%
4, 20 弱定NP, 複数		Once they were inside Disneyland, the kids dashed to _____ (この「乗り物」について、聞き手は、これまで見たこと聞いたことではない。ここでは漠然とした「乗り物」を指している。)	rides, the rides, 分からない	
5 後置修飾型, 単数, 母集団内token数1		This is _____ that I met yesterday. (聞き手はこれまでこの「少年」に会ったことではない。この文を聞いても昨日「私」が会った「少年」は1人であるということが分かる。)	boy, a boy, the boy, 分からない	
6 弱定NP関連, 不可算NP, 全体の一部		_____ leaked out of the tank. (聞き手はこれを聞くとき、タンクに空気が入っていたことは知っている。空気が全部漏れたわけではない。)	air, the air, 分からない	air: 88.3% the air: 13.5%
7, 21 弱定NP, 競争型 ^g , 複数		_____ are coming to Sendai! (仙台にはバスタの本場イタリアから来たバスタレストランがなかったが、イタリアのバスタレストランが選出することになった。(得たいが知れないが)イタリアのレストランがやってくるというニュース。仙台にすでにバスタレストランの経営者の衆話。聞き手もそのイタリアのレストランのことを一切知らない。)	Italians, The Italians, 分からない	The Italians: 62.2% Italians: 39.6%
8 新出, 単数		I saw _____ on the table. (聞き手は、この本を、これまで見たこと聞いたことではない。)	book, a book, the book, 分からない	
9 既出, 言い換え, 複数		There were a pair of sneakers and a T-shirt in the box. I chose _____. (聞き手はこれを聞くとき、タンクに空気が入っていたことは知っている。空気が全部漏れたわけではない。)	shoes, the shoes, この下線部にshoesは使用できない, 分からない	
10 露呈, 複数tokenのまわりが複数存在, 聞き手の前にまわりが1つ		Could you pass me _____, please? (聞き手の目の前にオレンジが複数入ったカゴが複数ある。話し手は聞き手の目の前のカゴが欲しい。)	orange, oranges, the oranges, 分からない	
11 露呈, 聞き手の前にtokenが1つだけ		Could you pass me _____, please? (聞き手の目の前にオレンジが1個ある。他のところにはない。)	orange, an orange, the orange, 分からない	
12 既出, 単数		There were a pen and a pencil on the table. I chose _____. (聞き手はこれを聞くとき、タンクに空気が入っていたことは知っている。空気が全部漏れたわけではない。)	pen, a pen, the pen, 分からない	
13 露呈, 複数tokenのうち1つだけが聞き手の目の前		Could you pass me _____, please? (聞き手の目の前にオレンジが1つだけあり、残りのオレンジは別のカゴに入っている。話し手は聞き手の目の前のオレンジが欲しい。)	orange, an orange, the orange, 分からない	
14 後置修飾型, 複数, 母集団の全てが部分か不明		These are _____ that I met yesterday. (聞き手はこれまでこの少年たちについて聞いたことではない。この「少年たち」が「昨日会った少年たち」の一部あるいは全員かはっきりしない文である。)	boys, the boys, 分からない	
15 連想照応型, 単数		I drove the car, but _____ stopped. So I had to walk the rest of the way. (聞き手は車を運転していたが、途中で止まった。そのため歩いて残りの道を歩いた。)	engine, an engine, the engine, 分からない	
16 後置修飾型, 複数, 母集団の全て		These are _____ that I met yesterday. (聞き手はこれまでこの少年たちについて聞いたことではない。この「少年たち」が「昨日会った少年たち」の委員と感じられる文である。)	boys, the boys, 分からない	
17 露呈, 複数tokenから1つ		Could you pass me _____, please? (聞き手の目の前にオレンジが沢山入っている。話し手はオレンジが1つ欲しい。)	orange, an orange, the orange, 分からない	
18 弱定NP, 複数		The team advanced to _____ (この文は「そのチームは準決勝に進んだ」という意味になる。2チーム同士が対戦し、勝ったチームは決勝、負けたチームは準決勝の試合で勝ったチームと対戦。これを繰り返して、最後の2チームが残り決勝を行い優勝チームを決める。大会全体では準決勝が2試合あることに注意。ただし、この文に出てくる「そのチーム」が経験した準決勝は試合である。聞き手はこのチームが戦った準決勝の試合についてこれまで聞いたことはない。)	semi-final, a semi-final, the semi-final, semi-finals, the semi-finals, 分からない	the semi-finals: 69.4% the semi-final: 22.5%
19 弱定NP, 複数		We went back home and cleaned _____ (家のほとんどの窓をきれいにしたが、全ての窓をきれいにしたわけではない。)	windows, the windows, 分からない	the windows: 61.3% windows: 40.5%
22 弱定NP, 複数		In Sendai, we went to _____ (Sendai: 宮城県仙台市, 東に海があり、西に山がつらなる。)	mountains, the mountains, 分からない	mountains: 3.6% the mountains: 97.3%
23 弱定NP, 複数		He looked into the tree and found a wire running through _____ (木の幹の中を電線が走っている。)	branches, the branches, 分からない	the branches: 95.5% branches: 5.4%

^a ここでは、弱定NPが正答と予想した問題について調査した。単数形の無冠詞型と「分からない」の選択率は自然句候補対象にならないので記載なし。また、極端に低い値だったため、グラフ番号18番の他の回答の選択率も記載していない。複数選択した回答者あり。^b 4, 2.において、グラフ表示のため、問題をL1up話者の正答率が低いものから高いものへと並べ直した。このため、調査紙で使用した番号をグラフ番号と呼ぶ。本研究ではこの番号を使用する。^c 各国語に翻訳した。L2英語話者には必要と思われる単語の説明も追加。正答とした自然句。L1英語話者が40.0%以上選択した選択肢。^d Birner and Ward (1994)から引用した。弱定NPを自然句(正答)として選出することになると予想したが最終的に自然句(正答)を弱定NP以外に選出した場合、「弱定NP関連」とした。^e 競争などにおいて「The Italians are coming! The Italians are coming!」(イタリアが攻めてきたぞ! イタリアが攻めてきたぞ!)のように敵国(明らかに敵国の全ての国民が攻めてきたときなどに使用する複数形の弱定NP。(メトニミーを介した解釈もあるため広義の弱定NPとして含めた。5.参照)

確認するため、その全てを選択した解答のみ正答とした。

調査はオンライン上で、L1Fi 語および L1Cz 語、米国 L1 英語話者には SurveyMonkey®を介して、また、L1Jp 語話者には Freeasy を介して実施した。N 数および n 数は各図表に記載した。

正答には 1 点、その他の解答には 0 点を与えた。このデータを 2 要因非加重平均分散分析に供した。非加重平均 \bar{y} を使用した理由は、各話者群内の英語レベルに偏りがあった場合に群間の比較が適正に出来ないことを回避するためであった。分析プログラムには js-STAR v8.1.1j と IBM® SPSS® Statistics 26 を使用した。

4. 結果

4-1. L1 英語話者の回答をもとに選択した自然句(正答)

L1 英語話者による選択肢の選択率を表 1 に示す。それをもとに採択した自然と考えられる NP(自然句(正答))も同表に示す。

単数 NP および不可算 NP では弱定 NP の選択率が他の選択肢に比べて低くなり、複数 NP では高くなった。なお、弱定 NP を自然句(正答)として選出することになると予想したがそれ以外のみを選出した問題の「注目事項」は「弱定 NP 関連」とした。2 番(単数 NP)と 6 番(不可算 NP)で、正答が弱定 NP になると予想したが選択率が 40%ラインを大きく下回った(それぞれ、10.8%、13.5%)ので、これらは「弱定 NP 関連」として分別した。複数弱定 NP の追加調査(調査 2)における L1 英語話者の選択率も同様に表 1 に含めた。追加調査でも複数弱定 NP の選択率は他の選択肢に比べて高かった。最終的に、正答が明白な問題の正答も含めて、調査問題の正答は、表 1 のように決定した。

4-2. L1 日本語話者、L1 フィンランド語話者、L1 チェコ語話者の比較調査

[調査 1] 各国毎に、英語レベル*問題における 2 要因の非加重平均分散分析を行った結果、交互作用はどの国も有意でなかった(Jp, Fi, Cz の順に $F(128, 5888) = 1.41$ n.s. $\eta^2 = .0241$ $\eta_p^2 = .0298$ $\eta_G^2 = .0271$, $F(64, 2112) = 1.39$ n.s. $\eta^2 = .0308$ $\eta_p^2 = .0404$ $\eta_G^2 = .0347$, $F(64, 1984) = 1.48$ n.s. $\eta^2 = .0358$ $\eta_p^2 = .0456$ $\eta_G^2 = .0391$)。両主効果は、各国とも、 $p < .01$ で有意だった。そこで、要因別に 95%信頼区間を用いて各水準の比較を行った(図 1, 図 2)。

(A) TOEIC 得点又は CEFR レベルによる効果(正答率への影響)

英語レベルが及ぼす、全 17 問を通した平均正答率への影響を確認した(図 1)。

L1Jp 語話者と L1Cz 語話者においては多くの水準の組で有意差($p < .05$)が認められたのに対して、L1Fi 語話者では 1 組でしか有意差($p < .05$)が認められなかった(①→考察)。L1Fi 語と L1Cz 語話者の値は B2 から C1/C2 に低下しているように見えるが、有意差は認められなかった。

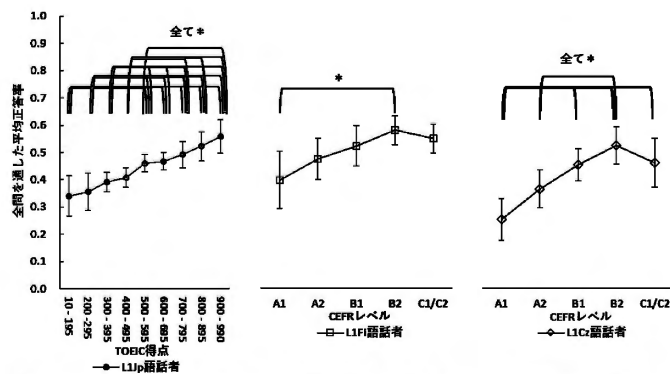


図1. 調査対象者の英語レベルと全問を通した平均正答率の関係(調査1)。エラーバーは95%信頼区間。
L1Jp語話者n数:(横軸左から順に)14, 16, 57, 59, 73, 78, 33, 27, 20; L1Fi語話者n数: 11, 21, 22, 41, 42;
L1Cz語話者n数: 22, 27, 36, 28, 16
*: $p < 0.05$

(B) 問題の種類による効果(正答率への影響)

問題のタイプによる正答率への影響を確認した(図 2)。

L1Jp 話者において後置修飾型では複数形(問題 14, 16)で正答率が高かった(順に, .630, .684) (②→考察)が, 単数形(問題 3, 5)では低かった(順に, .245, .348) (③→考察) (複数形の 95%信頼区間の下端と単数形の上端の重なりはなかった)。L1Cz 話者は後置修飾型の単数形(3, 5)と複数形(14, 16)の正答率が同じ話者群内で高かった(順番に, .464, .452, .485, .479)(同話者の上位 7 句以内)。

弱定 NP/弱定 NP 関連問題の正答率の平均は, L1Fi 話者(0.347) ≒ L1Cz 話者(0.338) > L1Jp 話者(0.251)であった(④→考察)。弱定 NP が正答となる問題では, 問題 4 で, L1Cz 話者および L1Fi 話者がどちらも L1Jp 話者との間に 95%信頼区間の重なりがなく, 前者 2 話者の正答率のほうが有意に高かった($p < .05$)。

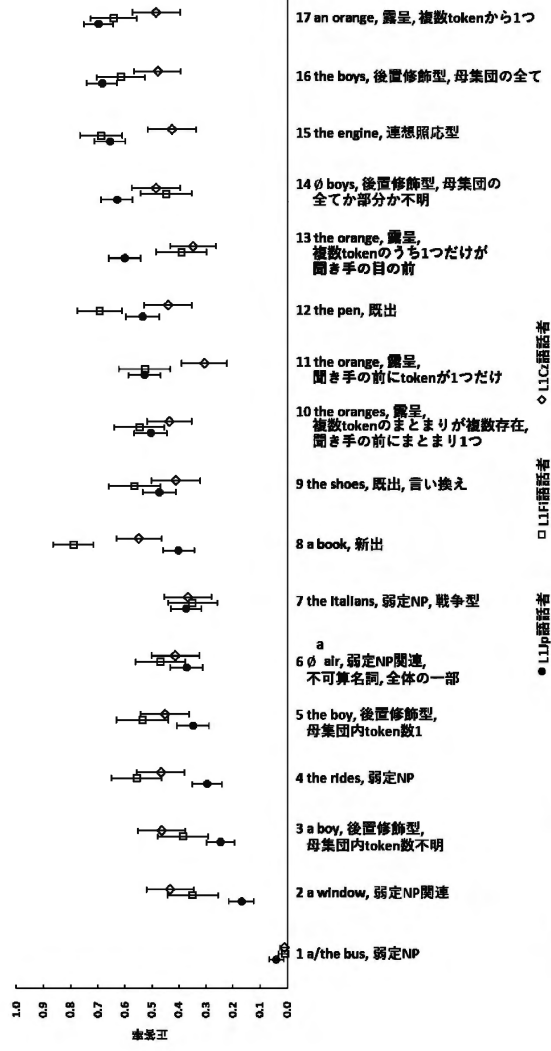


図2. 問題のタイプ別正答率 (調査1)。エラーバーは95%信頼区間。^a 無冠詞。L1Jp話者 N = 377, L1Fi話者 N = 137, L1Cz話者 N = 129

[調査 2 複数弱定名詞句追加調査] ここで, L1Jp 話者が L1Fi 話者, L1Cz 話者に比して運用力が低いと考えられる複数弱定 NP の問題を追加して調査・分析をした。各国毎に, 英語レベル*問題における 2 要因の非加重平均分散分析を行った結果, 交互作用はどの国も有意でなかった(Jp, Fi, Cz の順に $F(35, 755) = 1.48$ n.s. $\eta^2 = .0448$ $\eta_p^2 = .0641$ $\eta_c^2 = .0536$, $F(20, 610) = 1.06$ n.s. $\eta^2 = .0199$ $\eta_p^2 = .0337$ $\eta_c^2 = .0265$, $F(20, 620) = 1.60$ n.s. $\eta^2 = .0331$ $\eta_p^2 = .0491$ $\eta_c^2 = .0391$)。英語レベルによる主効果は, Jp, Fi で, $p < .01$ で有意, Cz で有意でなかった。問題による主効果は, 各国とも, $p < .01$ で有意だった。そこで, 問題の各水準における正答率を 95% 信頼区間によって比較した(図 3)。

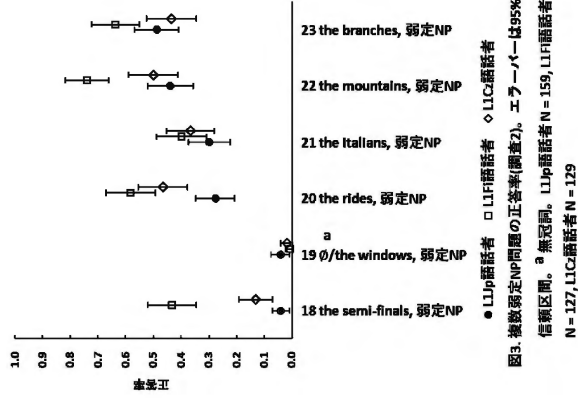


図3. 複数弱定NP問題の正答率(調査2)。エラーバーは95%信頼区間。^a 無冠詞。L1Jp話者 N = 159, L1Fi話者 N = 127, L1Cz話者 N = 129

(B) 問題による効果(正答率への影響)

図 3 を概観すると正答率は、概して、L1Fi 話者 > L1Cz 話者 > L1Jp 話者ということが分かる(⑤→考察)。18 では L1Fi 話者の正答率が他の話者の正答率に比べて有意に高かった($p < .05$)(⑥→考察)。L1Jp 話者においては 22 と 23 の正答率が他の問題に比べて高かった(⑦→考察)。

5. 考察

L1Fi 話者では、CEFR のレベルが異なることによる正答率の違いが、水準 1 組の箇所を除き、有意にあるとは言えなかった(結果①)。これにより、他の話者とは異なり下位レベルが持つ冠詞関連の運用能力は上位レベルの能力に近いことが示唆される。L1Fi 話者においては、冠詞関連運用能力が進歩するにつれて、下位レベルの者も上位レベルに近い能力を持ってきていると考えられる。一般に、運用能力の発展とともに、上位レベルの能力はある程度で頭打ちになり、下位レベルと上位レベルの能力差が縮まることが推測される。この点において、L1Fi 話者に比べて L1Cz 話者や L1Jp 話者の運用能力は、まだ十分に伸長していないと考えられる。

L1Fi 語および L1Cz 話者は L1Jp 話者に比べて、弱定 NP、特に複数弱定 NP の運用能力に秀でていた(結果④、⑤)。これは、一つには、隣国言語の影響があると考えられる。Fi 語は、定冠詞を持つスウェーデン語やノルウェー語(原田 2016. 猪浦 2016)から影響を受けていることが推測される。L1Fi 話者がスウェーデン語を学習した場合、彼らの英語にスウェーデン語の影響が見られる(Ringbom 1986)。また、Cz 語は定冠詞を持つドイツ語(原田 2016. 猪浦 2016)の影響が考えられる。Visit Czech Republic(チェコ政府観光局 2022)は「ドイツ語の影響を強く受けてい」と述べている。定冠詞を持つ言語の多くでは漸次、弱定 NP が発達すると考えられる(2-3)。隣国言語で発達した弱定 NP 感覚が L1Fi 語及び L1Cz 語を経て L2 英語の弱定 NP 運用能力を向上させた可能性がある(2-3)。

次に、Greenberg (1990)が提唱する進化が要因となっている可能性について述べる。Fi 語の指示詞 *se* は、1800 年代、既出の NP を照応できる形態素だったが、1970~1990 年代には既出なしでも同定できる機能を持った形態素に変化を遂げた(Laury 1997)。Laury (1997)は、*se* が既に定冠詞になったと結論付ける。既出なしでも同定できる機能を持ち、意味論的定性用法の段階まで至っている。また、Cz 語の指示詞 *ten* は、語用論的定性用法の地位を確立し意味論的定性用法に向かい進化しているという(Dvořák 2020)。定冠詞の進化の程度は Fi 語 > Cz 語と考えられる。このように、L1Fi 語と L1Cz 語の定冠詞は進化している。それ故、弱定 NP 感覚の転移の可能性が考えられる。進化の過程で、指示力が低下して弱定解釈が潜在し、これが L2 英語に転移しつつあると推察した。Fi 語と Cz 語の進化の程度は本研究での複数弱定 NP の運用能力のレベル差、L1Fi > Cz > Jp 話者(結果⑤)と矛盾しない。

複数弱定 NP 運用力が劣る L1Jp 話者(結果⑤、⑥)では、Jp 語で定冠詞が誕生・進化するに伴い L2 英語の複数弱定 NP 感覚が醸成される可能性もあるが、時間がかかる。また、隣国、中国や韓国とは海で隔たれており、そもそもそこで定冠詞言語は使われておらず(原田 2016)、その影響も望めない。されど、教育により複数弱定 NP の運用力を補うことはできると考えられる。

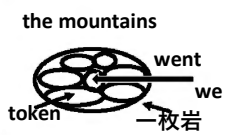
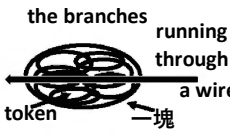
問題 14, 16 において L1Jp 話者は他の問題に比して高い正答率を上げた(結果②)。一方、弱定複数 NP 問題の正答率は低かった(結果⑤、⑥)。the + 複数 NP には必ず最大性が適用されるという感覚を持った日本人が多いのではないか。実際、the + 複数 NP は最大性を示すと答えた回答者は 42.5%、示すとは限らないと答えた回答者は 27.5%だったというデータもある(N=40)⁶。WEJD3 は the の項で「"the + 複数形名詞"のほか(中略 7)、容器に入った物質が"the + 単数形名詞"の形で主語または目的語になるときは「すべての…」を暗示する」と説明する。the は「【複数名詞や集合名詞の前で】すべての」という意味を持つと説明する辞書もある(SAEJD5, s.v. the)。文法書(安井稔・安井泉 2022. 江川 1991. 綿貫・ピーターセン 2007)にも同類の説明がある。本研究は、最大性は文脈依存的で、Brogaard (2007)の(5), (6) (本研究 2-1 の番号)などを例示し、む

しる「the+ 複数形名詞は、文脈から全てのものを指すことに無理がないと判断できる場合に「全ての…」を暗示する傾向がある」等と記載するのが良いと考える。

なお、L1Jp 語話者において後置修飾型単数形の正答率が低かった(結果③)理由は、不定冠詞 a(n)は「1 の」という意味で理解されていることが多いため、a boy that I met yesterday は昨日「私」が会った「少年」は1人と解され、the boy that I met yesterday は a がないので1人と解されなかったためではないかと考えられる。しかし、このことは検証が要される。

次に、問題 22 と 23 における参与者間の関係を、token 同士の距離感を考慮したイメージ図として表 2 に示す。当該文における行為の対象を、全ての個々の token とするのは無理があり、一部の token のみ対象としているのは明らかである。一方で、本研究は、the + 複数 NP が本質的には最大性を示すと考える。では、なぜ部分指示なのに the + 複数 NP を使用しているのか。本研究は、当該文における token は境界が明瞭でない、または互いに重なりがあり、分離して捉えることが難しいため、「代わりに」the + 複数 NP を使用して token 全体を一枚岩または一塊として一元的に指示していると考えられる。これは、the Rockies などの絶対複数に類似した用法で、当該文中では、mountains は「山あい」を、branches は「枝の集まり」を意味する「独立した単語」に近づいていると推測される。換言すると、当該弱定 NP は語用論的用法から意味論的用法に近づきつつあると推測される。一個体の「山あい」や「枝の集まり」を唯一的に指示する定 NP に接近しつつあるとも考えられる。Nauta, de Vries et al. (2022)も、mountains や branches と同類の複数 NP が弱定 NP として使われ得ることを述べた上で、意味を考慮し、事実上、単数の定 NP と同質と考える。この単数性は先述の一枚岩指示や一塊指示に起因すると本研究は考える。

表2
token同士の距離感を意識したイメージ図

22	23
We went to the mountains.	He found a wire running through the branches.
準絶対複数型	準絶対複数型
	

the mountains に関しては Aguilar-Guevara (2014)も複数弱定 NP とした上で、絶対複数と同種のものとし token 全体を指すとする。もちろん、特定の(1つあるいは複数の)山や枝に強く焦点を当てたい場合には大域的指示は行わない。それ以外の場合で分離困難感が強いときに、集合全体を一元的に指示することが多いと本研究は推測する。実際、分離困難感の順位を 18-23 の token に対して米国 L1 英語話者に付けてもらったところ mountains, branches の順で上位 2 位を占めたというデータもある⁸。

21 の the Italians はメトニミーによりイタリア国民全体→イタリア(国)→イタリアンレストランを指示することもある一方、単純に全イタリア人の一部(シェフやスタッフ等)を指示することもある。また、18 のトーナメント形式における the semi-finals は準決勝レベルという意味で使われることが多い。対して、Cleveland State softball ... advanced to the semi-finals scheduled on Tuesday, May 8 at 5:30 p.m. (Stutzman 2018)のように、1 試合を指示する用例も存在する。特定の開始時間 1 つが示されていて 1 試合を心象し書かれたことが推測される。以上を鑑みると部分集合指示の可能性を排除できないため、the Italians と the semi-finals も本研究では広義の複数弱定 NP として研究対象に含めることとした。なお、次に予定されている準決勝の 1 試合を意味する単数定 NP(連想照応型、表 1 グラフ番号 15 参照)として the semifinal を例文中に使用している辞書もある(LAAD, s.v. semifinal)。しかし、本研究では 22.5%しか米国 L1 英語話者に支持を得られなかった(表 1)ため 18 の正答には含めなかった。

ところで、L1Jp 語話者にも 18-23 の token に対して分離困難感の順位を付けてもらったところ、米国 L1 英語話者のデータと同様に branches と mountains が上位 2 位を占めた⁸。仮に複数弱定 NP を使用する要因の 1 つに token の分離困難感があるとすれば、L1Jp 語話者の正答率が高くなる可能性がある。確かに、L1Jp 語話者はこれらの複数弱定 NP において他の複数弱定 NP より正答率が高かった(結果⑦)。L1Jp 語話者は、L1 英語話者に近い分離困難感を持ち、準絶

対複数型の運用力が比較的高いと推測される。しかし、それでも正答率は the branches で.489, the mountains で.439 であった(図 3)。本研究は、これを改善する目的で「山と山、枝と枝など『構成要素』同士の境界が明白でない、または重なっていると話し手が感じる場合、一部の『要素』を指す代わりに、the + 複数形で『全体』を一括りに指す傾向がある」等と明示的に指導することを提案する。

なお、Aguilar-Guevara (2014)は、the mountains の場合、この全体に token 間の接続部の地形も含まれると説く。この観点から見ると、複数弱定 NP としての the rides と the windows, the semi-finals, the Italians にもそれぞれ遊園地と建物、大会、国という明確な接続部(接続剤)が存在し、これが分離困難性を上げる要因となり得る。従って、準絶対複数型として説明がつく。この「接続剤存在による分離困難性の上昇」を説明に加えることで、L1Jp 語話者の理解向上が期待される。

6. おわりに

本論文は、L1 定冠詞の進化による L2 英語での弱定 NP の運用能力向上を示唆する一方で、L1Jp 語話者の脆弱な部分として複数弱定 NP を指摘し、これに対する明示的教育の提案をした。複数弱定 NP 及び関連 NP について、意味計算メカニズムの観点から更なる分析が必要であるが、本論者が L1Jp 語話者に対する定冠詞教育に少なからずとも寄与することを期待する。

【注】

- 1 他にも親近性(Christophersen 1939)など複数の性質が提唱されている。
- 2 maximality には管見の限り定訳がないが、本研究においては最大性とした。
- 3 鈴木(2019)には、古高ドイツ語期は 750 年～1050 年とある。
- 4 ETS(2020)には TOEIC120 点以上:A1, 225 点以上:A2, 550 点以上:B1, 785 点以上:B2, 945 点以上:C1 との参考データが記載されている。
- 5 加重平均は単純に点数の合計を解答者の数で除した数。非加重平均は英語レベル毎に平均を出し、その平均の合計をレベルの数で除した数。
- 6 本研究が行った試験調査における TOEIC700 点以上の日本人のデータ。
- 7 辞書内他箇所にある例文を参照せよと指示が記載されている。例文は: The ship's engine stopped and (all) the lights went out.
- 8 本研究による試験調査。一体感の強い順に 6→1 と点を与えてもらった。平均: mountains 4.56, branches 3.92 (L1Jp 語話者においては順に 3.64, 4.29)

文献

- Aguilar-Guevara, A. (2014). Weak definites: Semantics, lexicon and pragmatics, Landelijke Onderzoeksschool Taalwetenschap.
- Aguilar-Guevara, A. (2019). Literal and enriched meaning of sentences with weak definites and bare singulars. Secondary Content, Brill: 26-57.
- Alishvandi, R. (2015). "The or that: Definite and demonstrative descriptions in second language acquisition." Journal Of Teaching Language Skills 34(1): 83-114.
- Birner, B. and G. Ward (1994). Uniqueness, familiarity, and the definite article in English. Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society.
- Brogaard, B. (2007). "The But Not All: A Partitive Account of Plural Definite Descriptions." Mind & Language 22(4): 402-426.
- Carlson, G. and R. Sussman (2005). "Seemingly indefinite definites." Linguistic evidence: Empirical, theoretical, and computational perspectives 85: 71-85.
- Christophersen, P. (1939). "The articles: A study of their theory and use in English."
- Demske, U. (2020). The grammaticalization of the definite article in German: From demonstratives to weak definites. Walking on the Grammaticalization Path of the Definite Article. R. Szczepaniak and F. Johanna, John Benjamins Publishing Company: 43-73.
- Dvořák, J. (2020). "The emerging definite article ten in (informal spoken) Czech: a further analysis in terms of semantic

- and pragmatic definiteness." *Naše řeč* 103(4): 297-319.
- ETS (2020). "TOEIC LISTENING AND READING TEST SCORES AND THE CEFR LEVELS." from https://etswebsiteprod.cdn.prismic.io/etswebsiteprod/5290f06b-e1cf-4254-8776-4a7c757f5252_TOEIC-Listening-and-Reading-test-CEFR-correlation-table.pdf.
- Greenberg, J. H. (1990). *How Does a Language Acquire Gender Markers? On Language: Selected Writings of Joseph H. Greenberg*. K. Denning and S. Kemmer, Stanford University Press.
- Ionin, T., S. Baek, E. Kim, H. Ko and K. Wexler (2011). That's the meaning: Interpretation of definite and demonstrative descriptions in L2-English. Selected Proceedings of the 4th Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA 2010), Cascadilla Proceedings Project Somerville.
- Ionin, T., M. L. Zubizarreta and S. B. Maldonado (2008). "Sources of linguistic knowledge in the second language acquisition of English articles." *Lingua* 118(4): 554-576.
- Keenan, C. (2011). Greenberg revisited: Diachronic development of article systems & the structure of DP. 13th International Diachronic Generative Syntax Conference.
- Laury, R. (1997). *Demonstratives in Interaction: The emergence of a definite article in Finnish*, John Benjamins Publishing Company.
- Nauta, S., H. de Vries and J. Doetjes (2022). The mountains are impure: the semantics of lexical plurality. *Semantics and Linguistic Theory*.
- Poesio, M. (1994). Weak definites. *Semantics and Linguistic Theory*.
- Ringbom, H. (1986). Crosslinguistic influence and the foreign language learning process. *Crosslinguistic influence in second language acquisition*. E. Kellerman and M. S. Smith, Pergamon.
- Russell, B. (1905). "On Denoting." *Mind* 14(56): 479-493.
- Stutzman, E. (2018). *Cleveland State Lady Cougars Advance To Semi-Finals*. Chattanoogan.com.
- Townsend, C. E. (1990). *A description of spoken Prague Czech*, Slavica Pub.
- 伊東美津. (2014). "日本人英語学習者による定冠詞 the の過剰使用について." *九州国際大学教養研究* 20(2): 1-19.
- 猪浦道夫. (2016). "【1章】世界の言語における冠詞の分布." <https://top.dhc.co.jp/shop/book/kanshi/pdf/1.pdf>.
- 江川泰一郎. (1991). *英文法解説*, 金子書房.
- 鈴木孝明・白畑知彦. (2012). *ことばの習得: 母語獲得と第二言語習得*, くろしお出版.
- 鈴木康志. (2019). "古高ドイツ語における命令・要求表現について——オトフリートの『福音書』(9世紀)を中心に——." *言語と文化: 愛知大学語学教育研究室紀要* 67(40): 29-44.
- チェコ政府観光局. (2022). "言語." #VisitCzechRepublic, <https://www.visitczechrepublic.com/ja-JP/57cff387-4684-472a-be8a-bd86d792898e/page/language>.
- 原田豊太郎. (2016). 英文ライティング「冠詞」自由自在, 日刊工業新聞社.
- 安井稔・安井泉. (2022). *英文法総覧*, 開拓社.
- 綿貫陽・マーク ビーターセン. (2007). *表現のための実践ロイヤル英文法*, 旺文社.